

5月31日、NPO法人富士山測候所を活用する会主催の特別講演会で、火山噴火予知連絡会会長で山梨県富士山科学研究所所長の藤井敏嗣氏に「富士山と噴火」という演題で講演をしていただいた。

藤井氏は「現在、口永良部島以外で噴火しているのは阿蘇山と桜島と西之島だけ。日本列島が活動期に入ったとは科学的には言えない」としながらも、「富士山は1707年の『宝永の大噴火』以来、噴火していないが、過去3200年間に約100回噴火している。平均すると、約30年に1回であり、ここ300年噴火してないのは異常で、いつ噴火してもおかしくない状態にある」と指摘した。

噴火の規模については、「富士山の噴火の約8割は小規模なものなので、次回も小規模の可能性が高い。しかし、大規模噴火を起こした世界の15の火山のうち、11の火山は数百年ぶりの噴火であり、富士山も大噴火になる可能性がある」という。

今、宝永の大噴火と同規模の噴火が起きたらどうなるか。富士山は「噴火のデパート」とも

準備不足の人災は避けたい

呼ばれ、割れ目からの溶岩噴泉のほか、溶岩流、火砕流、山体崩壊の可能性もある。噴煙の高さは1万メートルを超え、火山灰は偏西風に乗り関東地方まで及ぶ。交通機関のまひや停電、断水、

私見創見 Sunday

噴火に備える

さらには土石流や洪水などの2次被害が予想される。首都圏がダメージを受けることで、日本経済への影響も避けられない。

噴火の予知はマグマ溜まりの移動によっても行われるが、富士山のマグマ溜まりの位置は深

く、他の山に比べ予知が難しい。万が一、登山の最中に噴火に遭遇したら、できるだけ早く噴火口の位置を特定し、風上に逃げる必要がある。

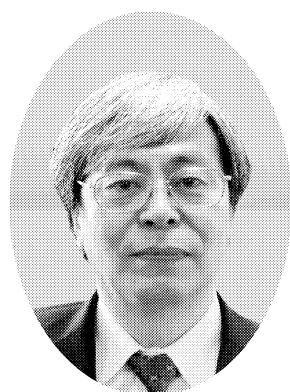
藤井氏は「富士山はいつかは

良や避難計画、観測・監視技術の向上が求められよう。

北奥羽地方に目を転じる。24時間態勢で監視する気象庁の常時観測火山のうち、北奥羽に影響のありそうな火山は、岩木

三浦 和彦

東京理科大学教授



みうら・かずひこ
1955年、八戸市生まれ。2014年から現職。日本工学会副会長、NPO学会副会長、NPO法人富士山測候所理事、学術活用委員会事務局長。東京都在住。

模噴火、岩木山は1863年の小規模噴火以降、共に噴火していない。八甲田山の直近の噴火は15〜17世紀、十和田は1千年以上前の915年で、かなり時間がたっている。

ただ、岩木山を除く五つの火山は2011年の東日本大震災以降、火山活動が一時的に活発化している。さらに、八戸にも多大な被害をもたらした「天明の大飢饉」は、1783（天明3）年の浅間山とアイスランドのラキ火山の大噴火が原因の一つとして挙げられている。高度1万メートル以上の成層圏まで達した火山灰や光化学反応により生成された硫酸エアロゾルが数年間にわたって太陽光を遮り、気温の低下を招いた。地球規模の大噴火が日本に影響を及ぼすことも十分に考えられるのだ。

物理学者で文学者の寺田寅彦

必ず噴火する。しかし、噴火している期間より静かな期間の方が圧倒的に長い。火山の恩恵を十分堪能し、火山と親しみ、火山を知り、噴火時の災害をイメージすることが大事だ」と述べ、講演を締めくくった。富士山周辺ではハザードマップの改

山、岩手山、秋田焼山と秋田駒ケ岳の四つ。近く、八甲田山と十和田も追加される予定だ。秋田焼山は1997年に水蒸気噴火、秋田駒ケ岳は1970〜71年にマグマ噴火と、比較的近い時期に噴火を起しているが、岩手山は1919年の小規模噴火は避けたいものだ。

「天災は忘れた頃にやってくる」との有名な警句を残したが、八戸市の郷土史家正部家種康氏は『南部昔話』で「災害は覚えていこううちに襲ってくる」と記した。天災は避けられないものの、準備不足による人災だけは避けたいものだ。